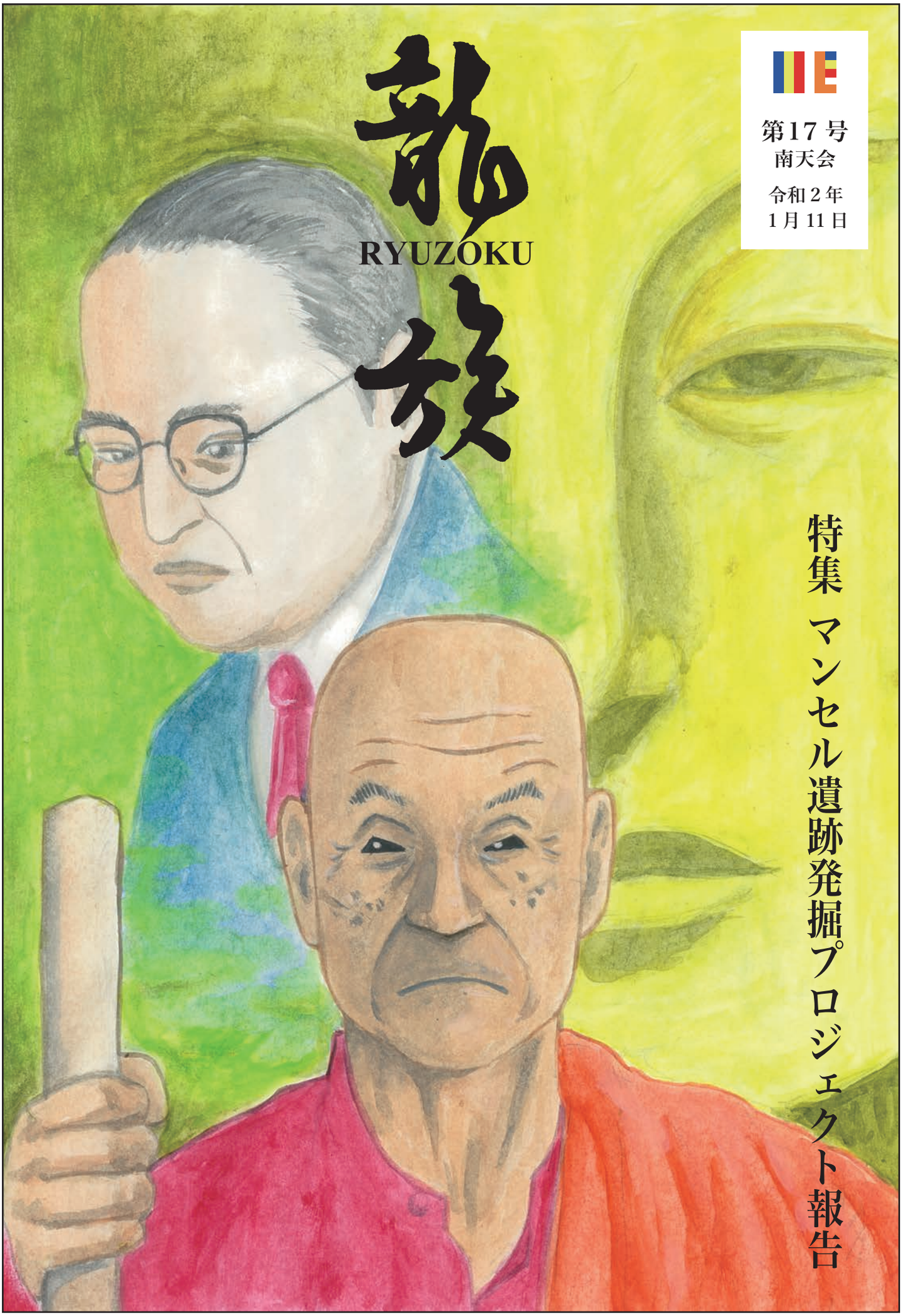
龍族

RYUZOKU

第17号
南天会
令和２年
１月11日

特集 マンセル遺跡発掘プロジェクト報告



表紙絵　石倉友人

佐々井秀嶺上人とのご縁

東京都新宿区 真成院住職　織田 隆深

佐々井秀嶺上人と私との縁をたどれば、20歳（昭和40年）の頃、アンベードカル博士の名前を聞いたことに遡るかもしれません。その当時は、インドで新しい仏教運動が興り、そのリーダーがアンベードカル博士であることぐらいしか知りませんでした。

佐々井上人の名前を知ったのは、30年ばかり前、『大法輪』という雑誌に、上人が巻頭の写真で紹介されていた時です。記事によると体調を崩しておられると書かれていたので、命を懸けてインドに仏教を弘めているこのような方には元気になってもらいたいと、陰ながらお加持をしたことがありました。その後、山際素男氏の『破天』などを読み、すごい人がいるものだとずっと気にはしていました。

平成21年5月11日に、岡山市山佐本陣で上人の講演会が開かれました。四十数年ぶりの帰郷で、今度インドに帰られたら会えない可能性もあり、一度ご尊顔を拝したく、聞きに行きました。写真で見ていた通りの日に焼けたお顔で、浪曲で鍛えた渋い声で毅然とした話しぶりでした。これが最後の機会かなと思っていましたが、その後上人が来日される度に、一ファンとして上人の悲願を成就させたいと、身元引受人になったり、東京滞在中の宿舎や南天会の会場に小寺を提供し、ささやかなお手伝いをしています。

アンベードカル博士の後継者として、多くの虐げられてきた民衆を仏教徒に改宗させ、インドに仏教を再興する、一大信仰運動の先頭に立たれ活躍されている上人を応援するのは、日本の僧侶として当然のことと思っています。竜樹菩薩の根拠地ナグプールを拠点とし、マンセルやシルプール遺跡発掘やブダガヤの大菩提寺管理運営権奪還運動に、文字通り命を懸けて邁進する姿はまさに生きた菩薩様です。インドは12億の人口を有し、ヒンドゥー教徒と1億余のイスラム教徒の対立が今でも続いています。カースト制度から解放されるには、現実問題として、他の宗教への改宗しかありません。

アンベードカル博士が、次のように述べている。「私はかつてガンジーに言ったことがある。不可触民制であなたと意見を異にするが、時が来れば、我が国に一番害を与えない方法で新しい道を選ぶであろう。仏教を選ぶことによって一番良いやり方でこの国に寄与したと信じている。仏教はこの国から生まれた文化の一端であるからだ。改宗によってこの国の文化的、歴史的伝統を傷つけない最良の道を自分は選んだのだ」。また「私は何故仏教を選んだか。それは、他の宗教には見られない三つの原理が一体となって仏教にはあるからである。即ちその三つの原理とは、理性（迷信や超自然を否定する知性）、慈悲、平等である。これこそ、人々がより幸せな人生を送るために必要とするものである」。この意志を継ぎながら佐々井上人も、インドに仏教を復興させようと活動されています。

敢えて希望を述べるなら、インド人の後継者を早く育ててほしいことと、政治運動でなく仏教の信仰運動として発展し、かつて釈尊の法座に、上は王侯貴族から下は一般庶民まで集まったように、身分や出生に関係なく、他の階層からの改宗者が増えてほしいことです。

上人の一層の活躍と健康を祈念いたします。ジャイビーム。

本

●『龍樹の遺跡の発見
インド、マンセル・ラームテク遺跡』

Ａ．Ｋ．ガイクワード著／中村龍海訳
六一書房（２０１８年）
Ａ５判５９８頁
定価（本体５０００円＋税）

龍樹菩薩記念研究協会発行のマンセル遺跡研究書を邦訳。これまでの発掘調査の概要に加え、先行研究の紹介、伝承や古書、新聞記事などによりマンセル・ラームテク遺跡とナーガールジュナの関係を詳説。医師でもある著者は龍樹の医学・科学等への貢献にも注目する。龍樹の歴史的実像にもっとも迫った龍樹研究第一級の資料。中村龍海氏の献身的努力により邦訳完成！

●『龍樹と龍猛と菩提達磨の源流
サータヴァーハナ王朝・パーンドゥ王朝・ボーディ王朝』

佐々井秀嶺著／中村龍海筆録・編集
東方出版（２０１５年）
Ｂ６判２５８頁
定価（本体２０００円＋税）

佐々井師の長年の龍樹菩薩研究を口述筆記。50年に及ぶインド仏教復興運動の傍ら、厖大な資料を収集・調査し、遺跡を踏査。大乗仏教の起源に迫る新事実を紹介。マンセル遺跡発掘にかける著者の信念が語られる。

『龍樹の遺跡の発見
インド、マンセル・ラームテク遺跡』書評

未だ多くの謎に包まれている、革命的思想家ナーガールジュナ（龍樹）の人物研究を新たな地平へと導き、古代インド仏教史の見直しをも迫る渾身の一冊

京都産業大学国際文化学科教授
Ｂ・Ｒ・アンベードカル研究会　志賀 浄邦

本書は、アニル・クマール・ガイクワード氏による大作『龍樹とマンセル・ラームテクの発見（Discovery of Nagarjuna and Mansar-Ramtek）』（原題）の、中村龍海（晃朗）氏による日本語訳である。原著書はインド・ナグプールに本部を置く龍樹菩薩記念研究協会より、２００９年に出版された。ここに本書の日本語版が出版されたことを慶賀するとともに、一大翻訳事業に臨んでそれを完遂し、日本人読者が原著書のもたらす知見に触れるための端緒を開いてくれた中村氏に心より感謝の意を表したい。言うまでもないことであるが、我々が原著書の内容を正確に理解することができるのは、中村氏による優れた日本語訳によるところが大きい。その翻訳の完成度の高さは、翻訳文と原文とを対照させてみると一層明らかになる。同氏は基本的に原文を逐語的かつ正確に訳す一方で、文意が曖昧になりそうな箇所は思い切って意訳を行うことによって、原文の趣意や意図をより明確に伝えようとしている。また、特に専門用語やヒンディー語等英語以外の単語に関しては日本語に翻訳しつつも、単語の横にルビを振るなどの措置を取り、原語のニュアンスが失われないようにする工夫も随所に見られる。

さて本書評では、評者の専門分野がインド仏教思想史（特に仏教認識論・論理学）であることから、主として仏教学の立場から本書の内容を吟味し、本書刊行の意義を考えてみたい。宮崎哲弥氏が本書の帯文で評している通り、龍樹は空の思想を大成し『根本中頌』等の著作によって中観派の始祖とされる他、日本においても「八宗の祖」と仰がれる存在であるにもかかわらず、その生涯は伝説と神秘的描写に彩られ、現在に至るまでその実像は不明なままである。また国内外の仏教学界においては、これまで龍樹の「思想」や「哲学」は主要な研究対象の

一つとされてきたものの、その出生地や活動地、活動年代、どのような人生を生きたかなど、龍樹の具体的な「人物像」については、資料の乏しさと不確実さも相まって、研究が進んでこなかったという経緯がある。そのような状況下にあって、本書は龍樹の人物研究に一石を投じる研究書であるといえよう。特に、マンセル遺跡から発掘された遺物・遺構をはじめとする考古学的資料を精査するにとどまらず、それらを文献資料と照合したり組み合わせることによって龍樹という「ひと」に新たな角度から光を当てようとする試みは、これまでほとんど存在しなかった。本書の刊行によって、歴史上の人物としての「龍樹」に関して具体的かつ実証的に議論することができる基盤が整ったとも言える。

龍樹の人物研究とその難しさ

それでは、龍樹という人物を研究することの難しさはどこにあるのであろうか。第一に指摘できるのは、ナーガールジュナという人物の実像を捉えるのが非常に難しいという点である。鳩摩羅什による『龍樹菩薩伝』(漢語)、玄奘による『大唐西域記』(漢語)、プトン及びターラナータによる『仏教史』(チベット語)等に龍樹の伝記が収録されているが、それらの作品における記述は、伝説的要素、フィクションと考えられる要素を多分に含んでいる。また、龍樹の最も有名な著作である『根本中頌』には、その後の大乗仏教思想史全体に多大な影響を与えた「空」の思想のラディカルかつ精緻な理論が説かれていることから、これまで龍樹に関しては思想研究が先行してきたという経緯がある。一方、人物研究についてはそもそも実証的に研究するための材料・基盤が乏しかった。日本国内においても早くから龍樹に関する研究がなされてきたが、このような事情から、龍樹の人物像に関しては、ある一定のレベル以上は研究が進展していないように見受けられる。

本書の原著者アニル・クマール・ガイクワード氏は、執筆にあたって、夥しい数の先行研究を参照また引用している。しかしながら、それらの大部分は、英語あるいはインドの言語（ヒンディー語、マラティー語等）で書かれた論文、研究書、報告書、もしくは新聞記事などであり、残念ながら日本におけるナーガールジュナ研究（特に人物、年代、伝記に関して）の研究成果が十分に踏まえられているとは言い難い。これには、著者のガイクワード氏がインド出身の研究者であるため、日本語で書かれた論文や研究書にアクセスすることが困難であったという事情もあるだろう。

上にも述べたが、原著書がこうして日本語に翻訳されたことの意義の一つは、龍樹の研究者を含む多くの日本人仏教研究者や仏教に関心を持つ一般読者のみならず、龍樹を祖師と仰ぐ日本仏教の諸宗派―例えば、天台宗、真言宗、曹洞宗、臨済宗、浄土宗、浄土真宗など―に属する僧侶や信徒などの宗門関係者も本書で明かされる内容に触れ、そこからこれまでにない新たな情報や考えを知ることができるようになったことである。以上のことから、まず日本の読者への補足の意味も込めて、本書ではあまり触れられていない本邦における龍樹（主として『根本中頌』の作者としての龍樹）の人物研究について簡単に紹介したい。その上で、龍樹の人物像に関して未解明であったり異論がある点に関して本書はどのような答えを用意しているか、という視点から本書を評してみたいと思う。

このような視点から論評を進めるのは、ガイクワード氏自身が本書の冒頭において提示している以下の問い：（1）龍樹は実在した人物か、それとも神話上の人物か、（2）どこで生まれたか、（3）生没年はいつか、（4）両親は誰か、（5）龍樹は二人以上いたのか、（6）同時代の王は誰か、（7）どのようなことに通じていたのか、（8）いかに仏教に貢献したか、（9）文学への貢献はどうか、（10）龍樹はナーランダーの学生か教師であったか、（11）他の僧院とはどのような関わりがあったか、（12）龍樹の友人にして支援者であったとされる王は一体誰なのか、（13）龍樹が書いた手紙は、どの王に宛てて書かれたのか、（14）どこで死んだのか（本書 p. 17–18　表記に評者による変更あり。以下、【問い（1）】～【問い（14）】として言及）が、これまでの龍樹研究において問題視されてきたこととほぼ重なっているからである。また、龍樹に関するこれまでの研究における問題点を踏まえた上で本書を読めば、より多くの発見やより深い洞察を得ることができると考える。

日本における龍樹の人物研究

年代論　【問い（3）】としても挙げられている龍樹の活動年代についてであるが、A．D．２―３世紀頃（１５０―２５０年頃）というのが現在の日本の学界における定説となっている。この年代の最大の根拠は、鳩摩羅什(クマーラジーヴァ、３５０―４０９年または３４４―４１３年）による「龍樹滅後百年にして人々が彼をブッダのごとく敬っている」という記述である。日本では宇井伯壽氏がこの年代を最初に提唱した。日本の研究者は概して中国の資料を重視しており、宇井説を採用することが多い。その他、E．ラモット氏は中国資料を慎重に検討し、A．D．２４３―３００年という年代を算出している。しかしながら梶

山雄一氏が、「決定的な新資料が見出されるまでは、われわれはナーガールジュナの年代を確定できない。われわれに対して彼はいまだに隠身の術を用いているかのようである」(『梶山雄一著作集第四巻 中観と空Ⅰ』p. 10) と吐露している通り、龍樹の年代は未確定のままである。

・龍樹伝　中国及びチベットにおいて数多くの龍樹伝が伝えられているが、それらの作品はいずれも伝説的・神話的描写にあふれており、決して龍樹の実像を伝えるものであるとは言えない。中国における資料のうち、比較的古く、内容としてもまとまっているのは、鳩摩羅什訳『龍樹菩薩伝』巻五十（大正大蔵経 no. 2407）である。他には吉迦夜・曇曜訳『付法蔵因縁伝』巻五（大正大蔵経 no. 2058）、玄奘三蔵作『大唐西域記』巻十（大正 no. 2087）などに龍樹の伝記が含まれている。日本人研究者による現代語訳としては、中村元氏（『龍樹』所収、『龍樹菩薩伝』）、定方晟氏（『カニシカ王と菩薩たち』所収、『付法蔵因縁伝』『大唐西域記』）、水谷真成氏（『大唐西域記』所収）があるが、最新の研究成果として、桂紹隆・五島清隆両氏によるもの（『龍樹『根本中頌』を読む』所収、『龍樹菩薩伝』）を挙げることができる。チベットにおける資料としては、プトン（１２９０―１３６４）とターラナータ（１５７５―１６１６）それぞれによる『仏教史』、スンパケンポ（１７０４―１７７６）による『パクサンジョンサン』等に龍樹の伝記が含まれている。

上述の諸々の伝記の内容は全く様相を異にするものの、中村元氏は数々の伝記に共通する点として、龍樹がサータヴァーハナ王朝と何らかの関係があったこと、バラモンの家系の出身であったこと、博学でバラモン系の種々の学問や哲学も修めていたと考えられること、一種の錬金術を体得していたこととなど挙げている（『龍樹』p. 51f.）。以上に加えて梶山氏は、龍樹がデカン高原の「ヴィダルバ」という地で生まれたこと、「出家受戒後、90日のうちに（大乗経典以外の）三蔵（経・律・論の経典の総称）を全て読誦し終えた」という伝記の記述が彼の著作に見られる部派仏教諸派（説一切有部など）によるアビダルマ哲学に対する批判と符合すること、「海の中の宮殿（龍宮）において、大龍菩薩より種々の大乗経典を授かった」という記述は、「正しい教えが世に行われない間、その経典は龍王の管理のもとに海底に秘蔵されるという大乗仏教徒一般の信仰の表現」(『梶山雄一著作集第四巻 中観と空Ⅰ』p. 7) であると考えられること、魔術や忍術などの数々の神通力や神秘的力は高い宗教的境地に至った者が長きにわたるヨーガ修行の中で自然と身につけるものであることなどを指摘している。梶山氏はさらに、サータヴァーハナ王朝の王のうち龍樹と親交があったのは、ゴータミー・シャータカルニー（在位８０―１０４年または１０６―１３０年）か、ヤジュナシュリー・シャータカルニー（またはシュリーヤジュナ・シャータカルニー、在位１７３―１９９年）のいずれかであった可能性を指摘している（上掲書 p. 9 参照、本田義央氏はハーラ王に比定している）。なお桂・五島氏によれば、龍樹に関連して「サータヴァーハナ」の語が現れる資料は７世紀以降のもの（玄奘及び義浄の記述）に限られるという(『龍樹『根本中頌』を読む』p. 342)。

・龍樹複数人説　龍樹に帰せられる著作は多数存在するため、これまで龍樹一人説、二人説（顕教・密教別人説）、四人説（仏教哲学者・タントラの作者・医学書の著者・錬金術師）などが主張されてきたが、一人説も依然として根強い（例えば、Jan Yün-hua, “One or Many? A New Interpretation of Buddhist Hagiography,, History of Religions 10-2, 1970, pp. 139-155)。この点についても、仏教学界においては確たる結論が出ていないのが実情である。

・ナーガールジュナ・コーンダの扱い

南インドのクリシュナー川の右岸に位置するナーガールジュナ・コーンダは、イクシュヴァーク王朝時代（３―４世紀）の仏教遺跡として知られる。一般にその名称から、この遺跡がそれ以前に栄えていたサータヴァーハナ王朝との関係で龍樹の故地あるいは活動の地であったと推測されている。『入楞伽経』で言及される「南方のヴェーダリー」をこの地と同定しようとする研究者もいる。しかしながら、ナーガールジュナ・コーンダと龍樹を直接的に結びつける証拠は未だ発見されていない（『龍樹『根本中頌』を読む』p. 342f. 参照)。なお、中国資料における「南天竺」という表現から、我々はすぐに「南インド」を思い浮かべがちであるが、例えばサータヴァーハナ王朝の版図は必ずしも現在のアーンドラ・プラデーシュ州と完全に一致するわけではない。そのため、「南天竺」という表現には注意しておく必要がある。「南天竺」が指すのは、アショーカ王時代の版図(現在のインド中南部まで）を基準にすると、現在のインド中部（デカン高原）一帯であったという見方もある（『龍樹と龍猛と菩提達磨の源流』p. 8-10,『必生 闘う仏教』p. 140 参照)。

以上、日本における龍樹という人物に関する先行研究を紹介してきたが、特に異論が多かったり一層の解明が求められる問題は、出生地（【問い（2）】に対応)、主な活動場所と活動年代（【問い（3）】に対応)、没した場所（【問い（14）】に対応)、龍樹は何人いたか（【問い（5）】に対応)、同時代の王・親交の

あった王は誰であったのか（【問い（6）（12）（13）】に対応）、といったものである。これらの問題に対して、本書はどのように回答しようとしているのだろうか。以下に見ていきたいと思う。

龍樹の出生地の問題（【問い（2）】に関連）

ガイクワード氏は、龍樹にまつわる種々の伝承（プトンの『仏教史』など）において龍樹の出生地として「ヴィダルバ」の地が言及されることを重視し、そのヴィダルバ地方（現在のマハーラーシュトラ州東部のナグプール地区及びアマラヴァティー地区に相当、「ヴェラール」とも呼ばれる）の中で龍樹との関連があると考えられる場所は、ラームテクとマンセルであると述べている（本書 p. 19）。本書の画期的な点の一つは、マンセルやラームテク等に関して、『インド中央諸州地名辞典』（１８６８年）やJ．D．ベグラー氏による『旅行報告』（１８７８年）、R．B．ヒラーラール氏による『ラームテク探訪』（１９０８年）など、現地への訪問・調査（考古学的証拠を含む）にもとづく地誌・旅行記・探訪記等の資料を積極的に活用している点である。例えばヒラーラール氏による、「龍樹に捧げられた洞窟」の中に「据え置かれた一体の龍（ナーガ）像と、アルジュナを表したと思しき人間の頭部像がある」（本書 p. 159）という報告は注目されるべきものの一つである。彼はまた、龍樹窟に見られた遺物などから、この龍樹が中観派の祖としての龍樹であると推測している。ガイクワード氏も、同氏による報告を自らの見解を裏付けるものとして引用しているようである。

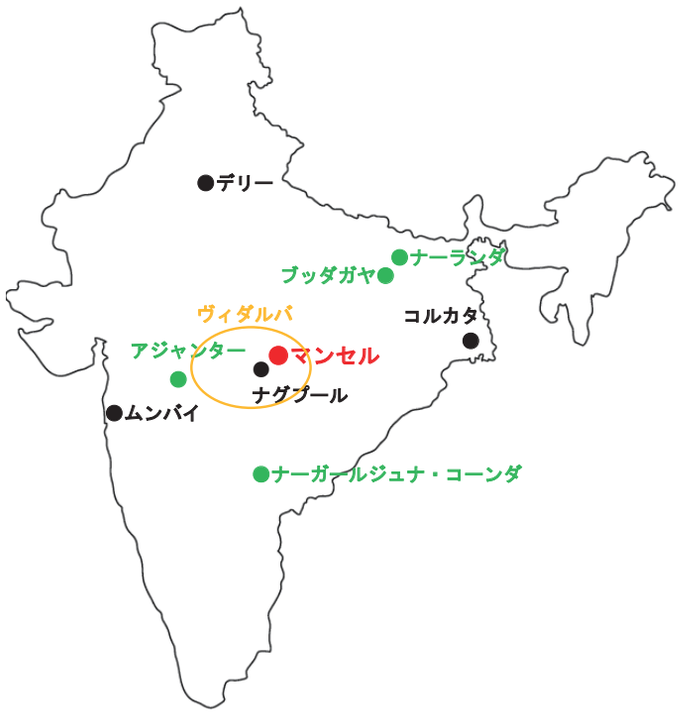
ヴィダルバとナーガとアンベードカルの関係

B．R．アンベードカル博士（１８９１―１９５６年、近現代インドにおける不可触民解放運動・仏教復興運動の指導者）が、１９５６年10月14日にナグプールにて30～60万人の下層民衆とともにヒンドゥー教から仏教への集団改宗を敢行したことは有名であるが、その際の演説の中で、彼が「ナーガ（族）」「ナグプール」「龍樹」などの名称や由来に言及したことは注目に値する。この時のアンベードカルによるスピーチは、インド仏教徒にとって歴史的演説と見なされている。本書のもう一つの画期的な点は、文献資料や考古学的資料のみならず、現在に続く仏教運動の発端ともなったこのアンベードカルの言説についても光を当てようとしている点である。その内容は、アンベードカルが集団改宗式を行う場所としてナグプールを選んだ理由に触れるものであった。その理由とは、（1）歴史的に、龍（ナーガ）族と呼ばれる人々がインドにおいて仏教を広めた人々であったこと、（2）ナーガ族とアーリヤ人たちは対立し、両者の間で何度も戦いが行われたこと、（3）プラーナ文献にアガスティ・ムニが一人のナーガを助けたという記述が見られるが、アンベードカル自身とその同朋たちは彼（ナーガ）の子孫であること、（4）ブッダはナーガ族にとっての救世主的存在（偉大なる人物）として登場したこと、（5）自分たちナーガ族の末裔はナーガ・プーラ（＝ナグプール、「龍の街」の意）の住人で、この周辺には龍樹山やナーガ河などナーガにちなんだ地名が多く存在すること（本書 p. 177f.）というように要約することができる。ガイクワード氏は、ヴィダルバ地域がサータヴァーハナ王朝によって治められていたという歴史を踏まえた上で、「龍樹は同王朝の同時代人であって、マンセル・ラームテク遺跡は龍樹が生まれ、そしてその生涯のほとんどを過ごした場所なのである」（本書 p. 362）と明言している。アンベードカルによる演説をきっかけとして、ヴィダルバにおける仏教文化、ヴィダルバとナーガ（族）、またヴィダルバと龍樹の関係などが、近現代インドを生きる人々によって再発見されたということもできるだろう。

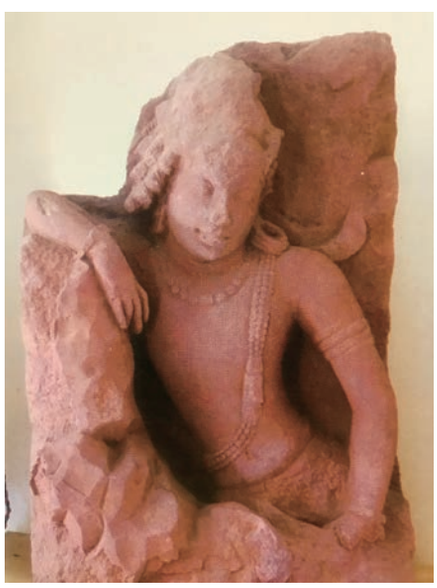
マンセル遺跡の発掘（１）～アショーカ王時代の遺物と遺構の発見～

第６章に収録されている各種新聞の諸見解（速報一～三〇）を見ると、マンセル遺跡（及びその周辺の遺跡）の発掘とそこからの発見物がインドにおいてどれほど注目されているかを窺い知ることができると同時に、マンセル遺跡が現在も発掘の途上にあることがわかる。本書によると、マンセル遺跡の本格的な発掘は、１９９４年頃から開始された。その中でも特に注目されるのが、龍樹菩薩記念協会及び当協会会長の佐々井秀嶺師を中心とするチーム（監督：ジャガト・パティ・ジョーシ、A．K．シャルマを中心とするチーム）によるものである。２００２年、A．K．シャルマ氏は、「マンセル発掘報告書」を出版した。これによると、マンセルでの発見物は三つの時期：第一期・紀元前２００年から２５０年、第二期・紀元２５０年から５００年、第三期・紀元５００年から７００年に分類できるという（本書 p. 199f.）。まず第一期に属すると推定される発見物の中で最も重要なものは、ブッダが象徴的に表現された菩提樹の素焼き片である（本書 p. 549 写真３A参照）。一般にブッダの偶像表現は、紀元１世紀頃にガンダーラ地方あ

▲マンセルサイトⅡ

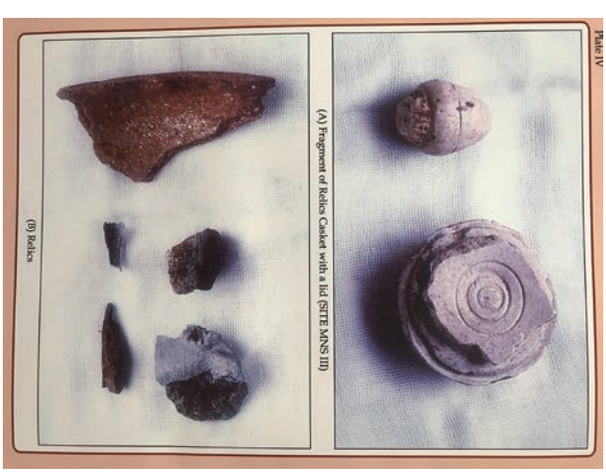


▲龍樹菩薩首なし像



▲菩薩像 (2)

▲菩薩像 (1)



▲舎利容器と骨片

▲デリー国立博物館蔵のクベーラ像

◀菩薩像

るいはマトゥラーにおいて初めてなされたというのが定説であるため、この菩提樹をかたどった遺物は、仏教文化史上かなり古い時代に属するものであることになる。ガイクワード氏は、アショーカ王の時代にすでにマンセルの地に仏教が伝わり、様々な仏教文化が創出されたと推測している（本書 p. 240f.）。さらにマンセル遺跡では、４基の仏塔（ストゥーパ）が発掘された。そのうち２つはマウルヤ朝期すなわちアショーカ王時代のもので、それ以外の２つはおそらくサータヴァーハナ朝期（前３あるいは１世紀―後３世紀頃）とヴァーカータカ朝期（３―６世紀頃）のものとされる。アショーカ王時代のものと見られる仏塔についてガイクワード氏は、宗務大臣（ダルママハーマートラ）の監督の下マンセルを訪れた初期の開拓者たち（＝ナーガ族の人々）が仏塔を建立し、その後それが増工された可能性があると述べている（本書 p. 270-272）。

マンセル遺跡の発掘（２）
～その他の重要な出土品～

・文殊師利菩薩像　その他の注目に値する出土品として、文殊師利（マンジュシュリー）菩薩像を挙げることができる。ガイクワード氏はトゥルシーラーム氏の研究を引用し、文殊師利菩薩像の存在はマンセルに密教（タントラヤーナ）の影響が及んでいたことを示唆していると言う。さらに、同地における密教の影響を考慮すれば、マンセル・ラームテク地域におけるリンガの存在を説明することも可能になるとも述べている（本書 p. 302-304）。

・舎利容器と遺骨　２０００年１月24日、マンセルより独特の舎利容器の破片と２片の焼けた骨が出土したが、それらはブッダあるいは偉大な仏教僧の遺骨であると見なされた。ガイクワード氏はこれを龍樹の遺骨であると比定し、マンセル遺跡で出土された仏塔とサータヴァーハナ王朝、さらにはヴァーカータカ王朝の関係について以下のように分析している。「今、２基の仏塔の建立と発見された骨壺とを分析するなら、答えを出すことはより容易になる。すなわち、骨は仏陀か、菩薩の位を成就した龍樹のものである。……アショーカ時代の後には仏教庇護者たるサータヴァーハナ王朝が続き、この時代に有名な人物が龍樹であった。同様に、ヴァーカータカ王朝も仏教を庇護し、仏塔を建立した。……ヴァーカータカ王朝は高位の仏僧の骨の上に仏塔を建立し、そう考えられる唯一の人物は龍樹だけなのではなかろうか。歴史と諸伝承とが裏付けるように、龍樹はヴィダルバで生まれて、サータヴァーハナ朝期に同地域で暗殺され、すると彼がそこで荼毘に付されたことをヴァーカータカ王朝が特定し、大いなる畏敬と称賛をもって、彼らがアショーカ仏塔の傍らに仏塔を建立した―すなわち同遺跡で龍樹の骨の上にヴァーカータカ王朝が仏塔を建立したという可能性が残るのである。このように、ヴァーカータカ王朝が龍樹の骨の上に仏塔を建立したと考えるのが、最もあり得そうで正しそうである。」（本書 p. 305）

以上のように、マンセル遺跡から発掘された出土品や遺構は、アショーカ王時代に始まりヴァーカータカ王朝期へと連綿と続く仏教文化の伝統の存在を示している。これらの発見物に対しては様々な解釈が可能であろうが、それらはヴィダルバ地域において一大仏教文化が生み出され繁栄したことの証左となる。本書 p. 245 において指摘されている通り、今後さらに調査が進めば、歴史家や研究者はインド仏教史を書き改める必要に迫られることになるだろう。そう考えると、マンセル遺跡が世界の仏教徒にとって重要な巡礼地となる日もそれほど遠くはないのかもしれない。

サータヴァーハナ王朝の時代

・サータヴァーハナ王朝とは　ここで、龍樹と関係が深いと言われてきたサータヴァーハナ王朝について押さえておきたい。前１世紀～後３世紀頃、デカン高原において、ドラヴィダ人によって建てられたアーンドラ王国が独立して建てた王朝である。そのためアーンドラ王朝と呼ばれることもある。アショーカ王時代のマウリヤ朝に一時的に朝貢していたが、マウリヤ朝が崩壊するとデカン高原一帯を支配した。紀元前１世紀頃から急速に勢力を伸ばし、後１世紀には北西インドのクシャーナ朝と対抗する勢力となった。同王朝はアーリヤ文化を積極的に受け入れたため、多くのバラモンたちが移住した。彼らはバラモン教を伝えたが、仏教やジャイナ教を信仰する人々も存在した。サータヴァーハナ王朝とマンセルの関係

マンセル遺跡のいわゆる「王宮複合建造物」と呼ばれるものはどのような経緯で建設されたのであろうか。上に見た通り、マンセルの丘にはサータヴァーハナ王朝以前にすでにアショーカ王によって作られた仏塔が存在していたと考えられる。ガイクワード氏によると、サータヴァーハナ王朝が同地にまず王宮を建設し、さらに僧房を増築したと理解するのは適切でない。「王宮複合建造物」はむしろ、サータヴァーハナ王朝が当初から僧院として建設したものであったと考える方が合理的であり、このことは同王朝が仏教を庇護していた事実によっても裏付けられると言う（本書 p. 322f.）。同氏はさらに、龍樹との関係を考慮すると、マンセル遺跡において見られる、王宮のような外観をもった巨大複合建造物

は、サータヴァーハナ王朝期にそのいずれかの王によって建立された龍樹の大寺（マハーヴィハーラ）である可能性が高いとも述べる。そして、サータヴァーハナ王朝の衰退後、この寺院複合建造物は反仏教運動家によって襲撃・破壊された。ヴァーカータカ王朝の人々もしくは地方の住人たちは、破壊された僧院の修復と再建を行い、さらに新しい僧房が建立された可能性もある（本書 p. 324）。ガイクワード氏が考古学的諸資料にもとづいて立てた以上の仮説は十分な説得力を持つように思われるが、どうであろうか。

ハーラ王と龍樹の関係（【問い（6）・（12）・（13）】と関連）　龍樹と親交のあった王は、サータヴァーハナ王朝のいずれの王なのであろうか。ガイクワード氏は、龍樹と親交のあった王をハーラ王と特定するS．V．ソホーニ氏の研究を引用し、彼の立論を肯定的に受け取っているようである。ソホーニ氏が出した結論は以下のようなものである。ハーラ王と龍樹が同時代人であるとする第一の根拠は、詩人バーナバッタ（7世紀頃）による『ハルシャ・チャリタ』における記述である。第二の根拠は、『勧誡王頌（スフル・レーカ、親友書簡）』における記述であり、ソホーニ氏はこの手紙の送り主は龍樹で、受け取り手はハーラ王であると見なす。第三の根拠は、パーダリプタによる詩にも見られる、サータヴァーハナの王が龍樹とともに龍の島（ナーガ・ドヴィーパ）を訪れたという伝承である。それによると、ハーラ王が龍樹と思しき人物とともに行ったと考えられている場所はセイロン島で、同島にあるジャフナ半島が、「龍の島」とよばれていたことを証明する十分な証拠があるという。さらに、ハーラ王が龍樹と共に訪れたパタラの土地（ローカ）とはセイロン島であったと述べている。ソホーニ氏は最終的に、龍樹が紀元150―200年の間の時期に影響力をもつようになったと結論づけている（本書 p. 363f.）。上述のソホーニ氏の立論に従うとすれば、従来1世紀前半頃とされてきたハーラ王の在位期間を見直す必要があるだろう。一方、ガイクワード氏自身は龍樹がサータヴァーハナ王朝のどの王と親交があったかについて最後まで明確な考えを打ち出してはいない。

・サータヴァーハナ王朝以後　ガイクワード氏は、サータヴァーハナ王朝によって建設された僧院等がヴァーカータカ王朝によって修復・増広され、さらにヴィシュヌクンディン王朝によってさらなる増設が行われたという仮説を立てている。そして、マンセルの僧院はナーランダー僧院に匹敵する、中央インドにおける仏教研究・学修の中心地となるに至ったという（本書 p. 237f.）。すなわち、サータヴァーハナ朝期に建設された僧院は、ヴァーカータカ王朝を経て、ヴィシュヌクンディン王朝に至るまで「再利用」され続け、最終的に仏教研究・仏道修行のセンターとして確立されるに至った、というのである（本書 p. 240）。しかしながら、9世紀以降ヤーダヴァ王朝の時代になると、マンセルにあった仏塔や僧院は完全に破壊されるに至ったとも述べている（本書 p. 242f.）。以上のように、マンセルにおいて仏教文化が誕生したのはアショーカ王の時代であり、その後、サータヴァーハナ王朝からヴァーカータカ王朝、さらには7世紀のヴィシュヌクンディン王朝に至るまで一貫して仏教文化が生み出され、保持され続けてきた可能性が高いということが説得力をもって語られている。マンセルを龍樹の故地もしくは活動の地であると見なすためにはさらなる調査と検証が必要であろうが、我々は少なくとも同地に仏教文化が根付き育まれてきた場所であることについては認めざるをえないようである。

龍樹が後年に訪れた場所と活動した場所

・ナーガールジュナ・コーンダについて　ナーガールジュナ・コーンダは、現在のアンドラ・プラデーシュ州に位置するが、龍樹が活動していたと考えられる時代はサータヴァーハナ王朝の統治下にあった。そして、これまで多くの研究者が、その地名との関連性から龍樹の故地もしくは活動地をナーガールジュナ・コーンダであると見なしてきた。しかしながら、同州には古代に仏教文化が繁栄したことを示す遺跡が数多く存在するものの、現在に至るまで、龍樹とナーガールジュナ・コーンダとの関連を立証するような碑文等の直接的な証拠は見つかっていない（本書 p. 126f.）。プトンの『仏教史』に登場する「吉祥山（シュリーパルヴァタ）」（龍樹が晩年を過ごしたとされる場所）に関しても、同じ地名がナーガールジュナ・コーンダ近く（クリシュナ河沿岸）に存在するものの、そこで活動したという確たる証拠がない点ではナーガールジュナ・コーンダと事情は同様である。ガイクワード氏自身は「おそらくナーガールジュナ・コーンダが、龍樹の後半生と関わりがあったろうことは明白である」としつつも、一方で「この問題は未解決で、自由な議論に対して開かれたままである」（本書 p. 128）とも述べており、この問題に関して明確な結論を打ち出してはいない。いずれにしても、ナーガールジュナ・コーンダと龍樹の関係性については今後再検討される必要があるだろう。

龍樹の入滅とその場所（【問い（14）】）

・マンセル・ラームテク　ガイクワード氏は本書冒頭において、龍樹の死とその場所について以下のような重要な指摘を行っている。

「同地（＝マンセル・ラームテク）こそが、サータヴァーハナ王朝と同時代に出た龍樹に関連する遺跡であり、龍樹の工房と―彼がここで暗殺されたことから―龍樹の遺骨が見出されるかもしれない他ならぬその舞台として、踏査されねばならぬ場所であるということを、今こそ確信の下に言うことができるだろう。」（本書 p. 21）

そして龍樹の半生については、以下のように簡潔にまとめている。龍樹が６００年生きたという伝承は、彼の長生を象徴したものである可能性が高い。ナーラーンダー僧院の運営に携わったあとは、生誕地でもあるヴィダルバ＝マンセル・ラームテクに戻り、そこで最期の時を過ごしたが、その時、近隣の丘で暗殺された、と（本書 p. 112）。

・龍樹による首布施の伝承　玄奘による『大唐西域記』やプトンによる『仏教史』には、龍樹の死にまつわるエピソードとして「龍樹による首布施」の話が現れるが、これに関してガイクワード氏は興味深い考察を行っている。彼は、チャンドラ・ナルナワレー氏の研究を参照しながらも、王子が龍樹に首の布施を依頼したという説話は事実を伝えるものではなく、反仏教運動家たちによって周到に計画された陰謀であり、自殺ではなく斬首による暗殺であったと推測している。その根拠として、マンセルで見つかった石灰像とナルナワレー氏が龍樹山で見たという石像に構造的な類似点が認められること、また像は寝ているような姿をしているが、おそらくこれは龍樹が眠っている時に暗殺されたことを示唆していること、などを挙げている（本書 p. 371）。

龍樹は一人か複数か？

ガイクワード氏は龍樹４人説にも言及するものの、「マンセル・ラームテクの龍樹は中観哲学の開祖、インド化学の父、およびサータヴァーハナの同時代人として賞賛されている最初の龍樹であったということは真実である」（本書 p. 336）、また「龍樹の著作について混乱させるのは、古代インド医学とまた文学のなかに、複数の龍樹が描かれていることだ。しかし詳細な情報が手に入るのは、それらの龍樹唯一人についてのみだ」（本書 p. 449）とも述べており、基本的には龍樹一人説を支持しているようである。「龍樹」という名を有する複数の人物の存在に関しては、後代の何者かが「最初の龍樹」と彼に連なる伝統に自らを重ね、「龍樹」と自称した可能性を指摘している。その他、龍樹の信奉者たちが、例えば錬金術や密教などに関する著作を権威付けのために「龍樹作」と見なしたことから、後の時代にそのように伝承された可能性も考えられるであろう。

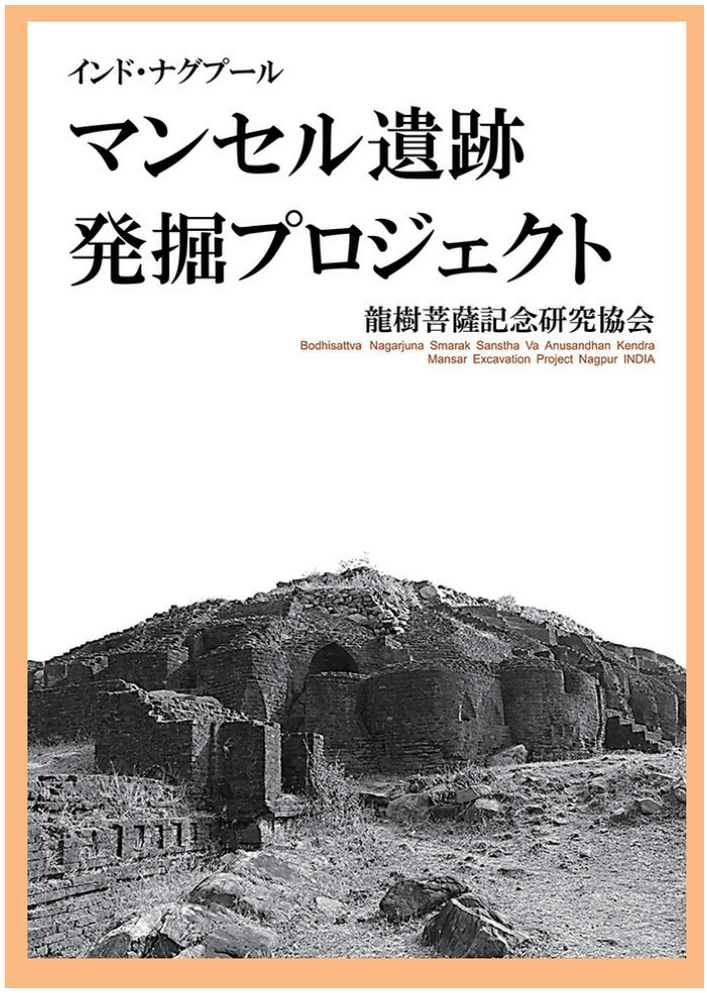
「反仏教運動」について

ガイクワード氏は本書において一貫して、インドの長い宗教史において「反仏教運動」が存在したと主張している。これは彼本人が仏教徒であることと無関係ではないのかもしれないが、インドの長い歴史の中で、仏教徒とその他の宗教に属する者たちの間で度々対立や争いがあったことは想像に難くない。同氏によると、「反仏教運動」は仏教文化の隠蔽や破壊という形を取ることもあれば、元々仏教遺跡であった場所をヒンドゥー教の遺跡として意図的にもしくは誤って認定したり、仏教遺跡があった場所に新たに寺院を建立するという形を取ることもある。反仏教運動や破壊活動を行うのはイスラム教徒のみではない。マンセルに関してもこのことは例外でなかった。ガイクワード氏は、龍樹という人物が当時仏教復興を担った「菩薩」であったことから、反仏教運動は一層熾烈を極めたのではないかと推測している（本書 p. 160f.）。同氏はさらにインドにおける仏教遺跡に関して、「建立、破壊、また建立、そして利用と再利用とはインドにおける重要な一連の出来事で」（本書 p. 324）あるとも述べている。

結びに代えて

ガイクワード氏は、本書において最終的に「今、マンセルの遺跡はサータヴァーハナが龍樹のために寺院（ヴィハーラ）を建立した場所であったという結論を下すことができる」（本書 p. 337）と総括するとともに、「龍（ナーガ）達、アショーカ、サータヴァーハナ王朝とヴァーカータカ王朝の関係を確証するだけの、十分な歴史的根拠や考古学的遺跡までもがある。もし全てが理解されたなら、インド化学の父たる龍樹の若い頃や活動の場と、マンセル・ラームテクとの関連を実証することは容易になる。要は真っ当に理解し、解釈するということなのだ」（本書 p. 376）との見通しを語っている。本書を通読した読者は、最早、彼のこの確信に満ちた結論と見通しを簡単に否定することはできないだろう。今我々に求められていることは、本書に書かれていることを「真っ当に理解し、解釈すること」（It is a matter of understanding and interpreting it properly.; Discovery of Nagarjuna and Mansar-Ramtek, p. 199.）なのではなかろうか。

※六一書房ＨＰ「書評コーナー」第44回（２０１８．４．20）より転載



2019年度 マンセル遺跡発掘申請についてのご報告

中村 龍海

マンセル遺跡発掘プロジェクトチーム

本年６月京都において佐々井上人同席の上、マンセル遺跡発掘に向けてミーティングを行いました。その後、発掘許可申請を行う過程で遺跡発掘プロジェクトチームを結成しました。

メンバーは、岩崎好規氏（日本イコモス第17小委員会主査・地域地盤環境研究所代表理事）、志賀浄邦氏（京都産業大学国際文化学科教授・Ｂ．Ｒ．アンベードカル研究会）、佐々木一憲氏（立正大学法華経文化研究所特別所員）、飯田寿一氏（インド在住建築家）、中村龍海（京都情報大学院大学助教・立正大学法華経文化研究所研究員）、及び南天会事務局（小林・佐伯）が担当し、またこれまでに相談させていただいた先生方にもご協力をお願いしつつ、インド現地のＮＰＯ「龍樹菩薩記念研究協会」（佐々井上人会長）が主体となって、マンセル遺跡発掘について準備を進めてまいります。

本年度の発掘許可申請について

インド考古調査局（ＡＳＩ）から発掘申請への招待状が届き、７月末までに発掘計画書を作成し、許可申請書を提出しました。

前回（２０１６年）は考古局ＯＢのインド人研究者Ａ・Ｋ・シャルマ博士との連携に不備があり発掘方法について最終プレゼンの段階で反対意見が出て不許可となったことから、この度は事前に発掘計画内容等について同氏に了承を得て申請に臨みました。

しかし11月１日付けで佐々井上人の元にＡＳＩから封書が届き、今回の発掘計画について推奨しないとのことで、不許可となってしまいました。

原因としては南北からの隧道掘削という発掘計画への評価が微妙であったこと、また計画に関わるインド人研究者とＡＳＩ内部の人事的な関係が影響したことも考えられます。ブッダガヤ裁判同様に、アヨーディヤー事件判決直前で宗教遺跡の発掘について慎重になっている面もあるかも知れません。

計画を共同で進めている考古学や土木工学の専門家の先生方からは「残念。現在のインド政権下ではヒンドゥー第一主義だから大変でしょう。」「発掘許可を得られなかったのは残念ですが、まだ事業は始まったばかりと理解しています。いつでも調査に参加できる準備はしておきますので、前向きな気持ちでがんばってください。」といった激励の言葉を頂戴しました。

今後は、より信頼のおけるインド人パートナーの選定を徹底するとともに、発掘計画自体についても厳しい目で再検討し、ブラッシュアップして来年度の申請を行えたらと考えております。

皆様におかれましては引き続きご支援・ご教導賜れますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

ブッダガヤ大菩提寺
管理権返還運動

11月９日、長らく係争中であったアヨーディヤー事件の最高裁判決が下されるというニュースが流れ、ヒンドゥー教徒とイスラム教徒の対立による暴動を警戒し、インド全土に厳戒態勢が敷かれました。各地で学校や公共機関が休みとなり、街には警察官が配備され、駐在外国人などには外出を控えるようにとの通達が各外交機関から出されました。昨年のブッダガヤ大菩提寺管理権を巡る裁判の本格化と時を同じくするように、このアヨーディヤー事件の審議が動きを見せ、ついに判決に至ったわけですが、この一連の裁判と判決は、佐々井上人のブッダガヤ裁判に多大な影響を及ぼしています。実際今年になって予定されていたブッダガヤ裁判の公判はすべて延期とされ、佐々井上人側弁護団は２月、７月、10月と３度も審理再開の嘆願書を提出しています。

インド独立後から現代にいたるまで様々な問題の火種になってきた宗教間対立を象徴するアヨーディヤー事件とは、どのような事件なのでしょうか？

アヨーディヤーはインド北部ウッタル・プラデーシュ州にある都市で、古代コーサラ国初期の首都として仏典にも登場する古都です。釈尊在世時代にはサーケータという名で知られ、釈尊の遊行地として原始仏典やジャータカにも記され、また馬鳴菩薩の出身地で無著・世親菩薩が大乗仏教を大成した場所とも言われています。

ヒンドゥー教においては、インド二大叙事詩の一つである『ラーマーヤナ』において主人公ラーマ王子の故郷となっており、ヒンドゥー教七大聖地の筆頭に挙げられています。

コーサラ国マガダ国マウリヤ朝、またその後の様々な王朝を通じて有名都市であったアヨーディヤーには各宗教の寺院が建設されていました。その後13世紀にデリー・スルターン朝がこの地方を支配し、イスラム教が流入します。１５２８年ムガル帝国初代皇帝バーブルは、市内にあったラーマ寺院を破壊して、その跡地にバーブリー・マスジットと呼ばれるモスクを建設しました（このラーマ寺院の基壇には仏教寺院の遺跡が確認されており、仏教衰退後にヒンドゥー教徒が仏教寺院を破壊・改築して建てられたものであることが仏教徒の訴えによって示されています）。

１８５７年、イギリスはインド大反乱を鎮圧してインドを植民地支配します。イギリスは、宗教間対立あるいはカースト制を利用した分割統治を行い、インド人全体の結束を分断する政策を続けました。その影響は19世紀後半からの独立運動にも大きな影を落とします。１９４７年、結局ガンディーらの唱導した「一つのインド」という独立の形は実現せず、インドとパキスタンは分離独立という形を取り、ヒンドゥー教徒はインドへ、イスラム教徒は東西パキスタン（東パキスタンは現在のバングラディシュ）へ、実に１５００万人の大移動が行われ、多くの難民も発生し、宗教間対立はより深刻なものとなって、３次に及ぶ印パ戦争を引き起こし、両国が核開発にまで踏み切るという事態に至っています。

インド独立当初は国民会議派の世俗主義（セキュラリズム）により、宗教的な宣揚活動は抑えられてきました。１９４９年アヨーディヤーのバーブリー・マスジット内に、ヒンドゥー教徒によってラーマ神像が安置されるという事件が発生しますが、政府は宗教対立を懸念してモスクを閉鎖し紛争地として両宗教の活動を制限しました。

１９７７年、インディラ・ガンディーの強権政治に反対してジャナタ党が政権を奪取し、80年ジャナタ党政権で外務大臣だったバジペーイーがインド人民党（ＢＪＰ）を結成します。この頃前政権の混乱の中で宗教主義・民族主義(コミュ

ナリズム）が徐々に活発になり、その先導役を担った民族義勇団（ＲＳＳ）や世界ヒンドゥー協会（ＶＨＰ）などの勢力が伸張します。このヒンドゥーナショナリズムの象徴となったのがアヨーディヤーのモスク開放運動でした。

１９９２年12月６日、インド各地からアヨーディヤーに集まった20万人のヒンドゥー教徒がバーブリー・マスジットに押し寄せ、つるはしやハンマーを手に人力でモスクを破壊しました。わずか半日の間にモスクは全壊し、このニュースはインド中に流され、各地でヒンドゥー教徒とイスラム教徒の対立による暴動が発生、数日間で１０００名以上の死者を出す大惨事となりました。この様子は映画『ボンベイ』（１９９５）『スラムドッグ・ミリオネア』（２００８）などで描かれています。

この日、佐々井上人は同年５月に開始したブッダガヤ大菩提寺奪還闘争の第２次闘争としてデリーのボートクラブで大菩提寺返還の座り込みを行っていました。12月６日はアンベードカル博士の命日に当たり、デリーに集まった数万人の仏教徒と共に市内の目抜き通りを行進し、ボートクラブに戻ってくると、周囲の警戒が厳しくなっておりラジオでアヨーディヤーのモスク破壊を知ったそうです。『破天』によると、もともとＲＳＳやＶＨＰなどが主導したとされるアヨーディヤー事件は、ラーマ寺院の再建を目的とし、同年５月にはＲＳＳの本部のあるナグプールからアヨーディヤーに向けてラーマ・ラータ（ラーマの戦車）大行進という示威運動が行われていました。この運動の理由の一つに下層民衆の代表であるアンベードカル博士の追悼が掲げられており、モスク破壊の12月６日という決行日は、そこから来ているといいます。佐々井上人はこの動きに対して、カースト制を廃止しヒンドゥーダルマを強く批判したアンベードカル博士を民族運動に利用する本末転倒な暴挙として、新聞紙上でラーマ寺院建設に大反対する意見を載せていたということです。そしてこの行進に対抗してダンマ・ラータ（法の戦車）行進と称してボンベイ～デリー５０００キロのブッダガヤ大菩提寺返還を求める大行進を実行しました。つまりブッダガヤ大菩提寺返還運動はその開始当初からアヨーディヤー事件の反対運動という側面を持っていたことになります。

２００２年２月、ＲＳＳとＶＨＰは政府の管理となっていたアヨーディヤーのモスク跡地にラーマ寺院の建設を認めるよう政府に要請しました。時の政府は現在と同じＢＪＰ政権で、ＲＳＳがその支持母体というヒンドゥー教至上主義を掲げた政党でしたが、国内の混乱を避けるため建設を許可せず、モスク跡地での宗教活動の禁止を命じました。これに対しヒンドゥーナショナリストたちは各地で集会を開き、この動きに対抗したイスラム教徒によるグジャラートでの列車放火事件が発生し、全国で８００人以上の死者を出す暴動が起きています。

アヨーディヤー事件を巡る暴動や権利問題に関して現在までに多くの裁判が提起され、その中でも代表的な寺院建設を巡る裁判に関し、最高裁がついに判決を下したのでした。

判決内容は、

・紛争地の２．７７エーカー全体をラーマ神に付与し、連邦政府にラーマ寺院建設のためのトラストの設立を指示。

・国とウッタル・プラデーシュ州政府に対し、寺院近隣の土地５エーカーをモスク建設用地としてイスラム教徒に提供することを指示。

・１９９２年のヒンドゥー教徒によるバーブリー・マスジット破壊は違法であることを定義。

というものでした。

▲ヒンドゥー教７聖地

結果的には、ラーマ寺院の建設を許可するというヒンドゥー教側の主張に寄った判決とみられ、イスラム教側は判決への不満を表明しています。現在インドは５月に行われた総選挙においてもＢＪＰが圧勝し、現モディ政権を形の上では支持する状況になっています。そういったインドのコミュナル化の影響を受けた判決とも言えます。佐々井上人の弁護団ではこのような状況下でブッダガヤ裁判の審理を進めることは極めて不利であるという見解を示し、裁判戦略の立て直しが必要であるとの指摘がなされています。佐々井上人は、どんな状況下であれ後ろを向くことなく進んでいく決意をされていますが、実際に審理は延期に次ぐ延期となっており、なかなか進展を見ないのが現状です。

こうした状況においては、裁判とは別に各仏教国による国際的なアピールや、インド政府またインド世論に対する提言が求められています。インド仏教徒の人々と連携し、世界遺産に登録されたブッダガヤ大菩提寺の存続に供する形での働きかけが必要となっています。南天会では引き続き裁判援助支援を行うと共に、そういったアピールにも力を入れていきたいと考えています。日本仏教各宗派からの提言や、現地インド仏教徒の声を反映した研究、報道がなされることを期待しております。

▲バーブリー・マスジッドの破壊（1992 年）

▲ RSS のデモ集会

大菩提寺裁判費用支援者御芳名

長野県　荻須眞教	３００００円
東京都　渡辺典子	１０１００円

（敬称略）

※「裁判費用援助」としてご支援いただいた方のお名前を掲載しております。この他南天会支援金からも裁判費用の援助を行います。

※裁判情報は以下の通りです。

インド最高裁
市民法廷書面告訴２０１２年
訴訟番号３８０

：：お願い：：

1．インド政府、ビハール州政府、ブッダガヤ寺院管理委員会に申し入れ等を行ってください。

それぞれ所属される宗派、本山、組織にてこの問題について協議し、インド当局が平和的決断を以て返還を実施するようアピールをお願いします。運動資料、経過説明、申し入れ文案等、南天会から提供いたします。

2．裁判費用をご援助ください。

巻末に記載の振替口座にご送金下さい。支援金は当会でとりまとめ、インドのブッダガヤ大菩提寺解放本部の口座に送金いたします。

※備考として「大菩提寺裁判費用援助」とご明記ください。

※支援者の方には、南天会会報「龍族」にお名前を記載し、裁判経過および返還運動の状況を報告いたします。

10月6～8日
インド・ナグプール

大改宗記念式典

亀井 竜亀

10月6～8日、ナグプールの改宗広場で第63回大改宗記念式典が開催された。

初日朝9時、佐々井上人と弟子たち15名が会場へ向かうと、すでに遠くからやってきたという11名の家族が待っていた。今年の改宗式はこの家族から始まり、3日間で延べ1万人が仏教へ改宗した。

改宗式は1回20分ほどで終了する。少ない時で数十名、多い時には数百名が改宗を行う。

1つの改宗式が終わると、周りで待機していた人達が壇上の僧侶の前に集まる。そこから男女それぞれの列になって座ってもらう。式では三帰依五戒文と二十二の誓い（アンベードカル博士作成）を、佐々井上人または弟子の僧侶が唱えた後に改宗希望者が一緒に唱え、戒を授けるという方法で執り行われる。途中に割り込みをしてきたり、また声を出さない者がいたりと一筋縄では進まない。心から改宗を望んで行う人達がほとんどだが、中には記念に改宗式に参加してみようという人もいる。改宗式が終わるとその場で座ってもらい、改宗証明書の登録用紙をもらい、それに必要事項を記入し、隣の会場で証明書を発行してもらう。初日はこれを休みなく19時まで行った。

2日目は9時から17時まで改宗式を続け、そこからメイン会場に移り、18時からの国際仏教徒大会に参加した。今年は日本代表として、大学を休学してバンテージの下で修行をしに来た日野君がスピーチを行った。佐々井上人のことを偉大な大菩薩であると堂々とスピーチを行い、それを佐々井上人が自らヒンディー語に訳して民衆へ伝えた。佐々井上人は「俺はスピーチで自分のことをすごい人だなんて話さないんだよ」とはにかんでおられた。

最終日は、アンベードカル博士が1956年10月14日に改宗した時間に合わせて、朝9時ちょうどに、佐々井上人が壇上の中心から大音量で三帰依五戒文と二十二の誓いを唱え、集まった民衆が一文一文を続いて発声した。

佐々井上人はそこから改宗式会場へ移り、また休むことなく訪れる改宗希望者に対して式を行う。この日は日本人も多く会場を訪れた。在インド大使館職員の方やデリー支局の新聞記者、インド旅行中の日本人ミュージシャンも訪れ、日本の歌を会場で披露され盛り上がった。夜には再度メイン会場へ移動し、タイ国の僧侶やミャンマーから国賓を招いて、第63回大改宗記念式典が開かれた。日本からも支援者の窪寺氏、岸氏が壇上にあがり佐々井上人からスピーチを頼まれていたが、残念なことに時間の都合でお二人の声を聞くことはできなかった。

アンベードカル博士がこの地で仏教へ改宗して63年目、毎年会場を埋めつくすほどの人々が集まって来る。博士はこの状況を見てどのように思われているだろうか。

11月9日
東京・文京区

南天会交流会『はじめての海』上映会

小林 三旅

11月の交流会は、1990年代より佐々井師の映像を撮り続けている田口空谷氏をお迎えし、監督作品『はじめての

▲田口空谷監督

海』を上映しました。

南天会会員、佐々井師弟子の荒金さんのご縁にて文京区にある浄土宗のお寺、見樹院を特別にお借りすることができました。見樹院の本堂は特設スクリーンを常備しており、映画館のような環境での上映となりました。

映画『はじめての海』は２００２年の作品。ナグプール近郊、コンダサワリにある孤児院（現在は閉鎖中）の子供達がはじめて海を見るまでの過程を、インドの空気をそのままに、ゆったりと落ち着いたリズムでまとめた作品。田口氏の舞踏が時折差し込まれることによって夢幻的な世界に導いてくれます。

▶映画『はじめての海』より

20人程の参加者があり、上映後は荒金さん手作りのカレーとチャイをいただきながらの交流会。劇中に登場するちんどん団の諏訪さん夫妻が長野から駆けつける嬉しい再会などあり大いに盛り上がりました。

南天会の目標はバンテージの50年に渡る長い活動の中で生まれた日本人それぞれのご縁が再び繋がっていくことです。今後もこうした佐々井師の活動を支援し続けた方々の功績の顕彰を続けて行きたいと思います。

インド・ナグプール
現地報告

亀井 竜亀

ナグプールから車で1時間ほど離れたある村で小さなお寺を建設している。

この村は住民が１５０人ほどの小さな村である。

今年の1月に村出身のおばあちゃんがナグプールの病院で亡くなった。

このおばあちゃんは旦那様を早くに亡くされ、子供もおらず 佐々井上人が経営する老人ホームに数年前から入居されていた。とても明るく気さくな方であった。

このおばあちゃんは生前、自分の村にお寺を建ててくれれば 佐々井上人に自分の畑の土地を寄付しますと仰られていた。 佐々井上人は建設費用がなかったので、その話が進展することはなかったのですが、偶然にもインドで活動している日本人の建築家と出会い、その方にお寺の建設を提案してみました。

その建築家は自ら資金を集め、お寺を建てることを計画し、昨年には現場を視察し、佐々井上人そしておばあちゃんと村人たちで一緒に地鎮祭を執り行うことができました。

これから寺の建設が始まるという時に、彼女が心臓発作をおこして病院に運ばれたと連絡がありました。佐々井上人が病院に行くと、おばあちゃんは寺を早く建てほしいと息も絶え絶えに訴え、上人は毎日のようにお見舞いに行かれましたが、病院に運ばれて4日後に息を引き取りました。

最後まで自分の生まれ育った村に仏教寺院が建つことを望んでいました。

佐々井上人と建築家はおばあちゃんの遺志を尊重して、今年の2月から建設に取りかかりました。

私は現場監督として、毎週のようにこの村に通っています。

10月のある時、私がナグプールで行われた改宗記念式典のため10日ほど空けて村に行くと、村人たちが神妙な面持ちで「死んだ死んだと田んぼで」。私は最初、意味が分からず何があったのか理解できませんでした。村人たちの話をゆっくり聞くと、村人が田んぼにあった井戸から水を汲み上げるモーターの修理中に感電して亡くなったそうです。

まだ32歳でした。小学生の2人の父親で、寺の建設現場の基礎掘を一緒にしてくれたお父さんでした。

インドでは、死が身近にあるように感じます。

ある時インドラ寺の近くを歩いていると、ある女性から声をかけられました。毎日のように歩いてる道ですが、初めて見る顔でした。

その女性は、昨年亡くなった夫の一周忌のため、来週法要に来て欲しいと。当日、彼女の家行くと親戚、近所の人達が15人ほど集まっていました。

詳しく話を聞いてみると、その40代の女性は1年半ほど前に、このインドラ地区に住んでいた男性と結婚し幸せな生活を送っていたが、突然夫が病気になって亡くなってしまったそうです。今後どうして生きていったらいいか、子供もおらず 途方に暮れていました。

また違う日には、佐々井上人と活動を共にしていた40代の男性信者が、突然の心臓発作で亡くなりました。彼は誰より

も大きな声で「ジャ、ジャ、ジャ、ジャ、ジャイビーム、ジャイビーム」と、アンベードカル像の前でいつも率先して声を上げていたことが印象的な人でした。最近では自宅に大きな仏像を購入したと誇らしげに喜んでいました。

12月６日はアンベードカル博士の命日でした。インドラ寺の地域では各交差点ごとに祭壇が設けられるなど追悼イベントが催され、博士の業績を忘れまいと歌やスピーチが夜中まで続きました。その２日前、12月４日にインドラ寺の前に民衆が１００名ほど集まっていました。

そのうちの１人に何かあるのかと話を聞くと、寺の斜め前の家の２階で、27歳の若者が首を吊ったと。今警察が来て状況を確認している最中だと。

それぞれの死。

その問題は貧しさであったり、仕事がないことであったり、酒の飲み過ぎであったり、家族の問題であったり、設備や医療の問題であったりするかもしれない。

今年も多くの日本人の方々がナグプールの佐々井上人の下を訪れた。

ある女性は佐々井上人の身体を気功によって治すために、またある人は歌で日本とインドの交流を深めるために、またある人は法華経を唱えるために、またある人は研究者としてインド仏教を研究するために。

それぞれの人々が個々に問題を考え、周りを幸せにするため社会を良くしようと行動されている方々だ。

インドの問題について、65歳で亡くなられたアンベードカル博士は、『インドのカースト制度について』という著書の中で「カースト制度は同族婚をその本質とし、その維持のためにサティ(亡くなった夫と共に寡婦を焼く)、強要されるやもめ暮らし（妻を亡くした男性に独身を強いる)、少女婚を手段とした。

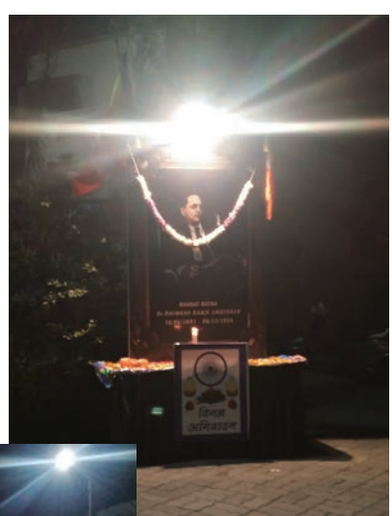
同族婚が、カーストに特有の唯一の特徴である。カーストの問題は、内部の男性女性の結婚可能な一団の間の不均衡を修復すると言う問題に帰着する」と述べている。

仏教へ改宗して２ヶ月後に亡くなったアンベードカル博士。63年後の今をどのようなインドになっていると考えていただろうか。

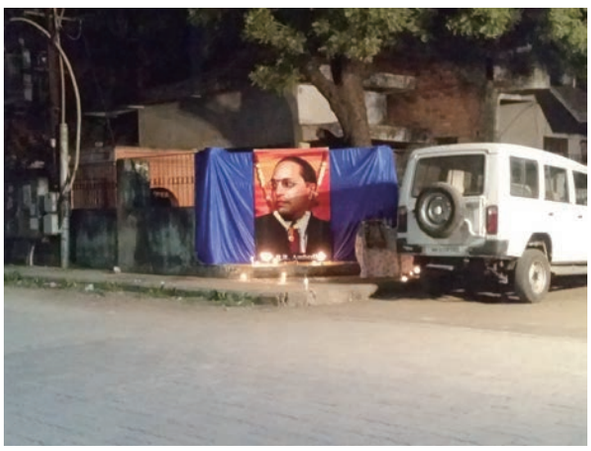
インド社会で今も佐々井上人は繰り返し三帰依五戒文を唱えている。

問題の根本となる悪行為から徹底的に離れること。

これを自ら考え実践することでしか、得られるものはない。



12 月 6 日
アンベードカル博士
の命日



寺院建設▶

佐々井上人お弟子
亀井竜亀師
インド滞在支援金ご報告

お蔭さまで現在までに合計42万１千円の暖かい御支援を頂きました。紙面をお借りして改めて御礼申し上げます。12月にビザ更新のため一旦帰国します。日本滞在中はインドと日本との連携のため、関係者支援者の皆様にお会いしたいと考えています。来年以降も引き続き御支援ご協力の程よろしくお願いします。

（亀井）

※

亀井竜亀師は、２０１６年10月から南天会第５次滞在支援隊としてナグプールに入り、その後佐々井上人について得度出家されました。現在までナグプールを本拠地としてインドに長期滞在され、引き続き佐々井上人のサポート、日本人訪問者の受け入れ、日本との連絡等様々な業務をお願いしています。

南天会としては日本インド往復の交通費（ビザ延長のための帰国や佐々井上人来日随行等）を支援してまいりましたが、これまでインドでの滞在費用、また日本帰国時の活動費などを本人の貯蓄、また支援者の援助によって賄っている状況です。しかしインドにおいては本人の収入はほとんど無いために年間の活動費を維持する事が困難となってきております。

そこで南天会としても亀井師を応援するべく広く会員、支援者の皆様に御支援を賜りたくこの場を借りて御願い申し上げます。

南天会会費・支援金は本来佐々井上人の活動支援のために使用しておりますので、亀井師への支援は別途勧募いたしたいと思います。何卒よろしくお願い申し上げます。

インド滞在支援金のご送金は、巻末に記載の口座【お振込先②】へお願い致します。

南天会会計報告(R1. 8. 1～11. 30)

単位:円

月	日	内容	収入	支出	差引残高
		前期繰越			803883
8	30	旅行案内等発送(308通)		25256	778627
8	30	会費･支援金(振込)	20000		798627
8	30	会費･支援金(現金)	50000		848627
9	1	本売上	5000		853627
9	16	本売上	1750		855377
9	17	龍族16号発送(国内･海外計403通)		74730	780647
9	18	大菩提寺裁判費用援助(振込)	10100		790747
9	25	亀井帰国交通費支援金		70000	720747
9	30	会費･支援金(振込)	149000		869747
9	30	口座手数料		582	869165
10	10	通信費		1080	868085
10	31	会費･支援金(振込)	219000		1087085
11	10	交流会開催費用(謝礼･会場費･食材費等)		27300	1059785
11	14	龍族 16 号印刷		45050	1014735
11	15	本売上	2000		1016735
11	30	会費･支援金(振込)	48000		1064735

【特別支援金寄附者御芳名】※敬称略　年会費とは別に南天会に支援金をいただいた方のお名前です。

池田俊昭　石村庄右　伊藤友人　今村美津子　岡本博子　奥平心月　甲斐三晴　加藤政子　小池一郎　河野太通　佐伯生子　高田厚信　田坂正樹　土岐信子　成山昌夫　馬場慎一　福瀬くに子　本多末男

その他、世話人賛同人各会員の皆様から様々なご支援をいただいております。

◆南天会現況（令和元年十二月現在）

正式会員数　215名

賛同人（五十音順・敬称略）

漆間宣隆（浄土宗浄土院住職・前岡山県佛教会会長）
奥平心月（釣月庵庵主）
織田隆深（高野山真言宗真成院住職・密門会会長）
小野重徳（仏国土の会会長）
黒澤雄太（剣士・日本武徳院師範）
小池一郎（株式会社マクシス・シントー常務取締役）
島影　透（株式会社サンガ社長）
高山龍智（佐々井上人お弟子）
土屋信裕（顕本法華宗弘通所法華行者の会主宰）
冨士玄峰（臨済宗・元ナグプール同友会世話人）
宮淵泰存（日蓮宗妙光寺住職・長野県修法師会会長）
宮本光研（真言宗御室派元執行）
宮本龍勝（佐々井上人お弟子）
山本宗補（フォトジャーナリスト）

※ 賛同人について

当会の主旨を理解し、協力、推薦する人を賛同人とし、会の運営に助言提案等をいただいております。

※ 世話人について

南天会諸業務をお手伝いいただける方は皆世話人とし、特に任命等はいたしませんので、どなたでも気軽にご参加ください。

ご支援 会費について

● 佐々井上人専用車寄進のお願い

２０１４年の体調危機の時に寄進された佐々井上人の専用車が、盗難に遭いました。

10月５日午後４時頃、近所の方から駐車していた場所から何者かが運転して持ち去ったという連絡を受け、すぐさま警察に訴えましたが未だに車は戻ってきていません。年に一度の改宗記念式典を翌日に控えた大事な日にこのような法難に合い、非常に困っています。

佐々井上人は以前、腰の骨を折る重傷を負っており、以来長時間の移動は大変身体に負担がかかります。身体に負担の少ない車で今まで通り縦横無尽に移動できるよう同型車の購入が必要となっております。どうかご支援の程よろしくお願いします。

車種：トヨタ　イノーバ
価格：３００～４００万円

高額ですので、１００万円ずつのご支援をお願いしたいと思います。支援者のお名前（個人、組織名または希望の名前）を車体側面に印字いたします。

支援ご希望の方は南天会事務局までご連絡下さい。

● 会員種類と年会費

・支援会員　１０，０００円
（会費＋支援金）／年
・一般会員　５，０００円／年
・学生会員　２，０００円／年
（※大学生まで）

龍族送付封筒の宛名ラベルに「会員種類」「会費納入済み年」が記載されています。

● 大菩提寺裁判費用支援

（→詳細12頁）

支援金は当会でとりまとめ、インドのブッダガヤ大菩提寺解放本部の口座に送金いたします。

※備考として「大菩提寺裁判費用援助」とご明記ください。

※支援者の方には、南天会会報「龍族」にお名前を記載し、裁判経過および返還運動の状況を報告いたします。

● その他ご支援

随時受け付けております。ご入会を希望せずご支援のみの方は、通信欄に「入会不要」とご記入下さい。

【お振込先①】
・年会費
・大菩提寺裁判費用支援
・その他ご支援
【金融機関名】ゆうちょ銀行
【加入者名】南天会
【口座番号】
０１３８０－０－９０１６４
「龍族」同封の振替用紙、もしくは郵便局備え付けの振替用紙をご利用下さい。

【お振込先②】
・亀井竜亀インド滞在支援
■口座記号番号（ゆうちょ銀行から）
０１３９０－３－１０７４４０
■加入者名　亀井竜亀
※その他の金融機関から送金いただく場合は次の口座へお願いします。
◆ゆうちょ銀行　一三九（イチサンキュウ）支店（１３９）
◆預金種目　当座
◆口座番号　０１０７４４０

：：龍　尾　言：：

医師の中村哲さんがアフガニスタンで銃撃に遭い亡くなられた。30年以上も海外の紛争地域で活動され、「困っている人が目の前にいたら手を差し伸べる」という純粋な思いを実行されてきた。福岡のペシャワール会の方々や全国の支援者、アフガニスタンの人々からの惜別のメッセージを読むと、今までの活動が多くの人々の心と繋がっていたのだということが感じられ、中村さんの突然の死が本当に残念でならない。

南天会も佐々井上人と様々な人々を繋ぐ窓口となって、そして佐々井上人を支えられるよう真剣に取り組みたいと思う。

（佐伯隆快）

（南天会事務局）
〒 710-0004
岡山県倉敷市西坂 1582-1 一心念誦堂内
TEL/FAX 086-463-9391
佐伯隆快（090-5304-8955）
小林三旅（090-4538-2677）
メール　nantenkai@gmail.com
URL　http://www.nantenkai.org/

最新情報は
Facebook『佐々井秀嶺資料室』
をご確認ください。